

幼児の自由画と生活感情

—幼稚園における所見に基いて—

西南学院短期大学児童教育科

高橋 さや か

- 二、鉛筆やクレヨンで描画する。
- 三、魚などむしって食べる。
- 四、欲しいものがあっても後でと言うことがわかる。
- 五、保育園へ一人でいける。
- 六、順番をおとなしく待つことが出来る。
- 七、お金を持って使いに行ける。
- 八、手伝ってもらわずに床につく。
- 九、毎朝顔を洗う。
- 一〇、スキップができる。
- 一一、鋏で形を切り抜くことができる。
- 一二、こぼしたり、ひっくりかえしたりしないで食べる。
- 一三、自分の経験話す。
- 一四、ことづけをまちがいなく伝える事が出来る。
- 一五、双六やカルタができる。
- 一六、人の前で歌ったりおどったりする。
- 一七、歯をみがく。
- 一八、ひとりで風呂にはいる。
- 一九、保育園へ行く時自分の持物をひとりで用意する。
- 二〇、ひとりで衣服がきれい。
- 二一、厚紙がきれい。
- 二二、小さなけがなら自分でくすりをつける。
- 二三、紐をかた結びにする事が出来る。
- 二四、自分の名前を正しくかなで書く。
- 二五、片手なら自分で爪をきる。

《序言》

幼児の自由画、生活感情と密接な関係をもつことは既に多くの例があげられ、改めて言うまでもないことのように思われる。しかし現在の状態では、少くとも、施設における保育生活の中で描かれた「自由画」がどの程度に真に幼児自身の生活感情を表現しているものであるが、俄かにはきめ難いといわねばならないのではないかと思う。施設の保育担当者が、子どもを十分に尊重し、自発活動を熱心に誘導しているにしても、子どもの造型活動は常に純粹に自己の全部に忠実であるとは限らない。

ここに試みた考察は、一九五四年度の西南短大児童教育科附属舞鶴幼稚園の園児のうちから、五―六才（最年長組）児七〇名、四―五歳児四〇名について、一年間の観察をまとめたものである。考察の対象にしたものは描画時の観察ノートと、子どもの作品とであるが、作品は、所謂「しごきの時間」―規程保育のプログラムの中の時間にかかせたものと、自由遊びの時間中に子どもが望んで自分か

らかいたものであって（後者は全部であるが）作画への指示が一切なかった折のものだけに限った。（作品数約二千点、一名当り一二〇点）

1、方法

作品を、①題材、②色彩、③形態、④筆勢、⑤塗り方、⑥輪郭線の六つの観点に従って類別し、知能・性格傾向・健康、及びそれらを総合したつ環境の諸条件に影響されるところの生活感情との関連を求めた。

2、概観

① 題材

「のりもの」「人物」をテーマとしたものが最も多く、各々四〇%（約八〇〇枚）を占めている。他は、動物家、食物及び食事、山、道、火事、行事（祭、誕生祝い、遠足など）が目立つ方である。花はよくかいてはいるが主としてつけたし（点景）であって、テーマとすることはごく少い。

子どもの側から見ると、題材がいつも大体きままっているものは、一一〇名中八〇名にも及ぶ。但し、かき方なり形態は一年間で変化もし発達もしているから、厳密にモチーフが同じであるとはいえないとも考えられる。抑圧感情と関連が深いとされている題材では、火事がかかりあった（一・五%）が、お化けやユレイ、蛇、おしっこ、などは例外的で各々三枚から八枚をかぞえるにすぎない。（平均〇・三%）概して子どもが題材にえらぶものは、日常生活でたのしいもの、あこがれているもの、親しいもの、うれしかった経験などで、多くは意識的に愉快であったことから再経験しようとして

いる。潜在的なものの昇華をはかることは、題材の上からは少いといえる。

② 色彩

「一色が主体的につかわれている」(二〇%)

「二、三色が主体になっている」(三〇%)

「ありったけの色が全部少しづつつかわれている」(五%)

「大体写実的・常識的な数色」(三〇%)

「原色の配合の顕著なもの」(二%)

「明るい色が主体になるもの」(四〇%)

「暗い色が主体になるもの」(三〇%)

「うすい色でしあげているもの」(二五%)

「こい色にしあげているもの」(四五%)

これは作品の方の分類であるが、子どもの傾向として同じことを見ると必ずしもパーセンテージは一致しない。つまり、子どもとして、大体明るい色を好む傾向と見られるものでも、時には暗い色を主体とする画をかいているからである。子どもの方で、いつも同じ傾向をみせるものは四〇%、ややその傾向か、という程度のもので二五%、あとは時と場合で、好みの傾向が一致しないものである。

③ 形態

「写実的にはっきりしている」(二〇%)

「印象的に適切、適確である」(二〇%)

「独特でやや異様である」(八%)

「形をあらわす線や面が完結している」(五〇―六〇%)

「形をあらわす線や面が完結していない、またはぼんやりしている」

る」(三〇%)

で、これは大体その傾向をもつ子どもの数に作品数をかけたものが、その傾向の看取できる作品数と一致している。

④ 筆勢

「勢のつよいもの」(四〇%)

「普通」(四〇%)

「弱いもの」(二〇—三〇%)

「終りをきちんとはめているもの」(一〇%)

「かき放しにしてあるもの」(一五%)

で、あとの二つは特に目立つもののみを数えた。これもと形態の場合と同じく、子どもの傾向と画の数量との計算はあうようである。つまり、大体、一人の子について一つの固定したタイプが考えられるとしてよいわけである。

⑤ 塗り方

「濃くおしつけてぬる」(二〇%)

「中等度に均一的にぬる」(二〇%)

「考えて強弱をつけている」(三五%)

「むらぬり」(二〇%)

「弱くぬる」(二〇%)

などが目につく。画の上からは特にそういうほどでもないものも多い。一人の子どものぬり方は、筆勢の場合ほど常に同じではない。同じ子どもでちがったぬり方をするものと、常に同じぬり方をするものとは、後者の方がはるかに少いようである。

⑥ 輪郭線

「黒で必ずはっきりとるもの」(一五%)

「それぞれの色でとるもの」(七%)

「特別なものだけとるもの」(五%)

「かこみ枠をつけるもの」(一%)

これも、大体輪郭をとる子はいつもとっているようである。

3、考察

子どもたちの大半はほぼ一定の傾向をもち、どの子のかいた絵か見当がつくようになるものであるが、その半面、必ずしもデータの上から一人の子どもが同じケースにあがってこないものもある。形の完結のしかたと、筆勢と、輪郭線と、この三つのあり方には、子どもによる固定的なタイプがあげられるようにうけとれるが題材、と色彩のあり方は、それほど、はっきりしたものがない。

クレオンとポスターカラーとは、明らかにポスターカラーの方が「自由」であり、クレオンでは殆ど描かない子が、ポスターカラーでは筆をふるっている。ポスターカラーでは人物を一人大きくかく頻度が高まっているのも目立つことの一つであった。

知能との関連性が強いものを取りあげると輪郭線と、写実的な色彩をつかうことは1、2一二〇(田中B式)以上のものに多い。

形が完結しないもの、筆勢が弱いもの、むらぬり、同じものを同じようにかくものは、稍知能が劣るものに多い。興味深く感じられるのは、ありったけの色をつかうもので、I・Q 一一〇一人、一二〇以上四名であり、中の一人は一四〇を示しているのであるが、揃って落着きがなく気まぐれな傾向をもっており、永く親しむ友達たちをもたないものである。不安定ではあるが知能は高い方で一風変

った個性がみうけられる。

性格傾向との関連はぬり方に最もよく表れるようである。濃く強くぬる子は自我が強く、家庭環境でわがままであるか抑えつけられているかしており、中等度に均一にぬる子、考えて強弱をつける子は温和な平衡のとれた性格傾向をもつ。筆勢の点でかき放すものは明るいがき大將型で知能はあまり高くないが、しばしばリーダー格に推される子である。

一色または二、三色を好んでつかうものは一般に外向的であるが、紫や茶色の好きなものには内向性の子も交っており、暗い濃い色を多く使うものは、内向性である上に強い性格である。しかし、考えられているほど色彩と性格傾向とは相関しないともいえるようである。明るい子でも、紫や茶色をかなりしばしば使っている。

最もはつきりうけとれたものに健康との関連であって、色彩、筆勢、及び形の完結度ははつきり健康状態とつらなっている。紫、黒、茶が注意をひくほど用いられた画は、殆ど一〇〇%胃腸の悪い子の、または胃腸障害を起した時の画であった。発熱や呼吸器系の障害の場合は筆勢が著しく弱まっているし、形の完結度も低い。

これらの事情を総合するに、幼児の自由画は、題材の点から見て主として意識的活動であると同時に、好めるもの、たのしき経験、又は希望を描くのが第一義的なものであって必ずしも、潜在的欲求の昇華ではないということである。周囲の社会的環境や人的環境の影響、絵本の影響などもかなりはつきりと形にあらわれる。色彩なども、案外に常識的なものの方が多い。

知能や健康のような基礎的条件はやや作品にあらわるが、それと

でも決定的なものとは言いがたいと思われる。いったい、特殊な例外のほかは、画をかくほどの時、子どもは抑圧の解放などというよりははるかに意識的な構成的な表現活動をしているのである。従って、生活感情もどちらかといえは、明るい面、積極的な面しかあらわれないことが多い。暗い面を出すようなときは、先づかかないのがふつうである。自由画に子どもの生活のかくれた面がひそむのを見出すことができる場合は、たしかに存在するが、子ども自身が意図していない感情までも自由画からよみとろうとする傾向をもつことはつつしみたいと考える。ありのままをありのままにうけとると、理由づけをしなくても大切な保育者の態度だと思ふ。

幼児画の指導について

新宿区立牛込仲之幼稚園

友田 静恵

年少組の時には個性豊かな絵が描けたのに、年長児になるに従って、幼稚園式自由画とでもいおうか、概念的、固定的なものになり、女兒はチューリップと人、男児は乗物と画材と表現形式が固定していく傾向がある。これは教師の指導が適切でなかったのではないか、又そこには幼児特有の心理的なものがあるのではないか、もしそのようなものがあるとすれば、どのような指導をしたらよいか、正しい描画の指導はどう在るべきかを考えてみたい。

幼児画の指導にあたり、先ず知っておかなければならない事は、描画の発達段階である。身体の発達と同様描画にも、発達の段階が